

ツバメが出ていったあとの静けさは、触れた彼の指先のように冷えていた。

さきほどまでそこにいた気配すら、少しずつ薄れていくようで。キッチンでたたずむ私は一歩、足を踏み出して——椅子に座った。許さないと言ったのは、ほかでもない自分自身。その言葉の重みを、いまになって思い知った。きっと、彼がこの家に足を踏み入れることは、ない。わかっている、私がそれを、選んだのだから。

一度、深呼吸をしようとして——浮かんだのは、ツバメだった。あのとき私を落ち着かせようとしてくれた彼の優しさは、本当？  
嘘？

それさえもわからないまま。

「ああ、私。本当にあなたのこと——」

つぶやいた言葉は、静寂にのみ込まれて誰にも届かない。窓の外に目を向ければ、雪が降りはじめていた。どうか、彼が無事にたどり着きますように。祈るように視線をそらし、こらえた涙が頬を伝う。

このあと、ツバメ宛てに解雇の通知を書いて、それから。それから——この痛みを抱えて、私は、彼のいない日々を過ごしていくのだろう。

◆  
万能薬で、母は元気になった。

床に伏していたのが嘘のように、今、笑顔で隣にいる。その効果に、あらためて万能薬の力を思い知らされた。だからこそ、この薬の存在を他言しないよう、両親に頼んだ。

それが、俺ができるルルへの償いだと思ったから。

本当のことを打ち明けて、彼女を失った。  
けれど、あのときに全てを明かすしかないと思った。  
だから、その選択に悔いはない。  
許されない俺が、薬屋リーファに戻ることはできない。  
もう、ルルに会うことも、きつとない。

「でも俺は、何度も君を思い出しちゃうんだろうな」

数日後、ルルから手紙が届いた。  
薬屋リーファの庭師<sup>と</sup>を解く、と。  
用件のみの簡潔な文面。  
見慣れた字なのに、まるで別人が書いたかのように思えた。  
これで俺は、父とともに薬屋クロラントに勤めることになるだろう。  
何度も読み返して、封を閉じる。

ありがとう。ごめん。  
——さようなら、ルル。  
届くことのない思いは、次第に、胸の奥に溶けていく。



春がきた。  
新しい庭師が来てくれて、薬屋リーファは再び患者を受け入れられる状態になった。  
今日はその庭師とともにイルムの街へ買い物に出た。  
いつでもにぎわいを見せる大都市は、春のあたたかさに浮かれているように思える。

「あ……」

遠目に見えた、白い背中。

行き交う人の波に揺れるあの姿は、きっと——。

間違えるはずもない、でも、見つけたところでどうにもならない。

私の決断は、変わらないのだから。

その事実はどうしようもなく胸が締めつけられて、私は目を背けた。

そして、その場をあとにした。



春がきた。

春の陽気に浮足立つ人々に紛れて、買ったものを抱え直す。

ふと、風に運ばれて懐かしい香りがしたような気がした。

「……ルル？」

思わず、名を呼んだ。

けれど、そこに思い描いた人の姿はあるはずもなく——。

なにをやっているんだろう、俺。

心の中で苦笑して、再び、歩き出した。

エンディングJ【すれ違う光】